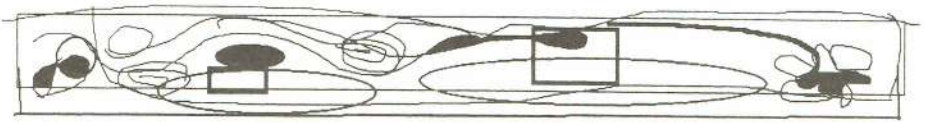
村野次郎創刊

香蘭

2019年(令和元年)12月号

第 96 巻　　第 12 号　　通巻 1068 号

二〇一九年(令和元年)十二月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第九十六巻第十二号



香　　蘭

2019年（令和元年）12月号
第96巻　第12号　通巻1068号

目　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（52）……柏原　恵　表二
作品一特選……坪倉・西野・飯島・石井・坪・伊藤（康）・鈴木（桂）・長野・柏原（義）…2
作品二、三特選（十月号）…岩田・臼井・岡野・金子（幸）・沙阿羅・中村（か）・牧田・松沢・山下・小笹・柏原（貞）・中島（紘）・能城・渡邉（典）…4
近詠十五首　松花堂弁当……大井田　啓　子…6
作品
一……8
二……23
三……31
推薦香蘭集……38
香蘭集……39
村野次郎への旅（117）……千々和　久　幸…20
転載　雁部貞夫歌集『子規の旅行鞄』評……千々和　久　幸…22
歌の生まれる場所（83）……竹本　幸　子…30
エッセイ・自由研究　野崎美智子の歌を巡って……長野　道　子…44
焦　点（十月号）名詞の効用……飯島　智恵子…46
作品一特選欄評（十月号）……香山　静　子…48
七　首　抄（十月号）……相川・脇谷・市川・手島…50
近詠十五首「姥捨て山」評（十月号）……高畠　憲　子…51
作品評（十月号）作品一……関口　静　子…52
作品二……城富貴美…54
作品三……小山ヨシ子…56
香蘭集……柏原　恵…58
緑　地　帯……西沢（君）・水本・滝山・大島（昌）・市川…60
明宝研究会第一一一回九月例会……丸山三枝子…64
文法あれこれ（7）……田端明…72
他誌拝見　108……渡辺君子…74
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……75
歌会及び会合・会員消息・他……78
編集後記・新宿日記……82
表紙絵……中村　陽子「鏡を置けば……」　目次・緑地帯カット……和田　和雄　表三

村野次郎作品　私の愛誦歌（52）

同じ土に住みゐし虫の死にたるを
命ある虫来りひきゆく

『明宝』

柏原　恵

『明宝』巻頭の昭和四十五年十一月の「人生」百首、同四十七年一月の「日々」百首と共に二ヶ月程の期間に作歌したもの。

「同じ土に住みゐし虫」は八首目の作品。

先生は、ふと見かけた二匹の虫の光景に感動し、関わる一匹の虫の行動に思わず釘付けとなる。先生自らも七十歳台後半ゆえ、何れ看取られる日も来ると思えば、自然と切ないものが込み上げてきたのでしょう。懸命に生きている小動物をしみじみ見詰めながら、どんな形であれ、共に生きてきたことには意味があるとしても、仲間だもの見逃すことは出来ない。先生の優しい人となりが見えてきます。

実際に生きている限り誰かと関わり合う共生していることも表しています。又、人生のあるべき姿を虫が示しているとも諭されているように思われます。この情景には、先生の深い思い入れと愛情が注がれています。

（『明宝』14頁、『村野次郎三百首』69頁に所収）

四選者の作品

夏逝く　　平塚　千々和　久幸

かたわらに沢のせせらぎ聞きながら鮎の焼けるを待ちつつ汲めり
時かけて串刺しの鮎が焼けるころ諸侯それぞれに酔いて候
こころ解き顔を火照らせ酌み交わすこのひと時が永遠にして
『完全なる結婚』はあれど完全なる一日はなしわが半生に
一人には余る刺身のワンパック買い来て今宵の酒盛りはじむ
洗濯機が回れる音を聞いているわれに末踏の荒野すでに無し
十月が突如わたしにやって来るもう後戻り出来ぬか海よ
身動きもならず言葉も発し得ぬ妻となりたるこはわが妻か

彼岸中日　　我孫子　丸山　三枝子

開くため閉じた扉の前で待ち中央特快高尾行きに乗る
今日ははの十三回忌ははを知らぬ少年もきて合掌をする
おかあさんあなたの子らは古稀を越え孫らは不惑を過ぎました
九人きりのうから集えりたらちねの母の法事は今年で仕舞
浄めたる墓域に読経ひびきつつアオスジアゲハふたつ舞いくる
岸に咲くコスモスゆれて浅川の水に陽が照る追憶めきて
上の座に遺影を据えてにぎやかに飲み食いをする老若九人
先の世も後の世も知らずそよぎおり令和元年彼岸中日

権萃　　東京　桜井　京子

強風に抗ひあらがひ空をゆく鶯のひたすら窓に見てをり
権萃と隠れ蓑の木隣りあひ権萃の樹にセミが来てゐる
柿の実の稚きが一つころげ落ち団地の真昼なにも起こらず
平和、へいわ唱へてをれば古びたる冷蔵庫に赤茄子腐り始めつ
虐待と煽り運転と文在寅がごちやまぜに来てこの夏がゆく
新聞のうへの小蝿は逃れつつ報復なんてやめとけと言ふ
つづまりは分かり合へないといふことが分かつたこの夏燃ゆるカンナよ
つやつやの藪椿の実ありしかど秋の来たればはじけてゐるぞ

忍びやかに　　横浜　渡辺　礼比子

何がなしこころは緩ぶ遺句集に見つけたる父の助動詞のミス
食堂の丸テーブルにどんよりと向き合う夫婦　ちちろ虫鳴く
歯が抜ける夢は異変の兆しとぞ吉とでるのか凶もあらんを
マイセンの花瓶割るごと失言す慶賀の席の大団円に
わが猫の遺品の餌を「喜んで頂く」といえり老いの猫友
うたた寝の夢のかたえを忍びやかに過ぎりゆきたり亡き猫の影
わが猫を葬りしセレモの火葬炉が嵐の波に水没せしと
空白の検索ボードに打たんとし、はて調べんとしたる語は何

作品一特選

（五選者共選）

妻のこゑ　　ふじみ野　坪倉　寛

彼岸花の似合ふ場所とは庭ならず稲を刈りたる畦道がよい
地獄ばな狐のたいまつ幽霊ばな花魁花とも捨て子花とも
朝顔が咲いたと喜ぶ妻のこゑ二度も三度も三度も四度も
生り木責めしたる柿の木いかにある古里とほし弟は亡し
唐突に財布を見せろと言ふ女わたしの切符盗つたでせうと
付き合ひきれず去ろうとしたが離されず面倒だから駅員を呼ぶ
監視カメラがひよんなところで役に立ち女はひたすら頭低くす

紅型文様　　東京　西野　美智代

感涙を拭く日疾く来よ　辺野古より紅型文様のハンカチ届く
おほかみと赤頭巾ちやんの声色に新米保父が園児泣かせる
仏滅に十三日の金曜が重なるけふは冬瓜を煮る
将来は宇宙飛行士のしゆんちやんが星を土産に呉るると指切る
逝く朝キセルのやうに首上げ祖母は目のみをわれに向けたり
宵宮にはぐれし四つ身のおかつぱを探しるたるもわれなりし夢
会へば子の無きを嘆きし旧友が教へ児たちに囲まれて逝く

にんまりと　　川崎　飯島　智恵子

幼子がにんまりわれに笑いかく一本だけの下の歯みせて
あやしてるつもりが何時かあやされていたりバギーの中の幼に
「すみませんベンチの荷物退かして」と喉まで出たがまたのみ下す
乗客はあらかた降りてその数に見合う客来る「区役所前」は
うるさいと咎められたる夜の窓がちゃがちゃがちゃ鳴く蟲虫
うりの棚たたみしあとに零れだねの秋海棠が根づきておりぬ
症状は「喉のイガイガ」と伝えれば医師は打ちこむ「喉のイガイガ」

ＬＩＮＥ　　習志野　石井　雅子

夫抜きの家族のＬＩＮＥの話題とはもつぱら夫の病状のこと
夫病みて平素は遠く住む子らとＬＩＮＥで結ぶ果てしなき夜
残る日々をいかに生きるか熟年の子らにはとほき死と思へども
病室に十七歳の実習生うぶ毛の残る水鳥さん来て
「お母さん大事にしいや」と言はれたと京都に暮らして二十四年の子
切り株をくり抜きたる巣箱でつくるとふ椎葉村の蜂蜜とどく
わが抱けばすぐに凭れて眠る子の八キロの重さ腕に残れる

幸せだ　東京　坪裕

一生に二度見られそうで幸せだオリンピックまで生きられそうだ
啼いている妻を求めて鳴いている蟬のペニスをわたし知らない
あえぎつつ人生長く来たけれど俺には今も座る椅子ない
歩くとき左右どちらでも良いけれどダンスは最初に左足だす
晩夏光するどく返し太陽光パネルは黙って仕事している
吾が前をあひるのように過ぎし人びわの香りがほんのりしたり
雑巾を絞るように語っても巧くいかない君との会話

朱印帳　東京　伊藤康子

退職の友へ贈るは朱印帳鳩居堂にて吾のも揃える
朱印帳を選んでおれば外国人観光客が寄りて尋ねる
何語かは知らねどこれは何なのかと尋ねるらしい　ご朱印帳ぞ
いろいろとお世話になってありがとう次に会うときはご朱印ガールズ
背より抜けゆくものありと離職後の友はひときわ穏やかに笑む
台風十五号が千葉を嚙みちぎり六十七万戸が停電となる
停電の復旧遅れを指摘する明かりのともるスタジオにいて

百日紅　西宮　鈴木桂子

あはあはとただよふごとく夏空に百日紅のくれなゐあはし
わが窓に寄りて桜の古木あり夏はびつしり蟬の来て鳴く
熊蟬の声ぢりぢりと八月の空をふるはせてただに鳴き継ぐ
腹痛をリンパ腫ゆゑと告げられて一月後にはすでに夫亡し
老いてなほ外に働けばつくづくと疲れをおぼゆおぼえて寂し
カーテンを開けしままにて眠れるをあかとき高く弦月の照る
こころよく疲れて帰る仕事終へそんな一日のありてうれしも

診察スケッチ　横浜　長野道子

日焼けして土色となる腕をふり病院までを歩いてゆくなり
診察の三日前より控えたるスイーツの類が脳裏をよぎりぬ
歩きゆく病院までの四十分長いようでも短いようで
受付に診察カードをすんなりと入れて戻りぬ呼吸のようなり
会計を待ちいる間に難病の手帳もつゆえ名を二度呼ばる
薬局のサービスにありしティーコーナー診察のあとは甘めの紅茶
雅子さん息災ですか　診察を終えると聞きたき声の一人に

ところに寄る　尾道　柏原義清

祖先たちが天まで拓きし島畑の荒放題を詫びつつ眺む
夕暮れの菜園は藪蚊の群れなすを口実にして早仕舞する
明日の雨ところに寄ると言われては降っても照っても文句のあらず
風物詩なりし夕立近ごろはめったにあらず豪雨はあれど
食べられるくだものだった柘榴の実その味知るは年の功かも
行く先を知らせておけと咎めおり泡盛さげて来るうからに
若き日は斯かるひまなど無かりけり五輪マラソンの予選見ている

作品二、三特選

（十月号作品から）　　渡辺　礼比子　選

〈作品二〉

一　軒　家　　安　来　岩　田　明　美

梅雨明けの長引く畑にふさふさとえのころ草の美し穂そよぐ
梅雨ぐもる夜空に潜む天の川笹にさらりと流れて来ませ
夜ごと点く向かうの山の一軒家住む人知らず星と見てゐる
わが家の父祖の植ゑたる糸桧葉は濡れぞぼちつつ気高く立てる

・遥かなるものへのあこがれを情感深く詠む。

茄子の花　　長　野　臼　井　紀代子

ほうほうと山鳩しきりに鳴く日ぐれ相聞と言えど何かさびしい
散乱のひかりを呑みて窓の辺にサボテンひとつまろく坐れり
やわらかな音して雨の水滴が色なき波紋広げていたり

・自然描写に心象を重ねた。三首目の発想に注目。

みどりを眺む　　尾　道　岡　野　甫　江

しつとりと梅雨の湿りも身にしみてじつと目をとづ手術のあとを
洗顔もシャンプーも禁止の七日間狗子のごとうろうろ過ごす
濁りなきレンズに見るものくつきりと梅雨の晴間のみどりを眺む

・術後の心もとなさを濃やかに描く。

眼で返す　　横　浜　金　子　幸　子

一年振りの甲状腺の検診日　頬よぎる風いと肌寒し
ドクターに問いかけらるるも声出せずただひたすらに眼で返す
喉元の写し出されし映像を見つめる医師の口元ゆるむ
真夜目覚めふと浮かびたる短歌一首レシートの裏に眠たげな文字

・病を養う身の心細さを実感を込めて詠む。

七月の憂鬱　　相模原　沙　阿　羅

体臭が大鋸屑のようになってきた　死んだら私は樹になるのだろう
食器など洗っている時なぜ浮かぶ　歌よ消えるなメモをとるまで
腕吊りておれども家事と自治会の仕事はせねば　何をさぼろう

・肝の坐った歌いぶりに力強さが感じられる。

世界遺産　　福　岡　中　村　かよ子

近鉄の各駅停車に乗る時は恋に破れた時と決めてた
祭りには一夜で消えるものを買う私をそこに置いてきたくて
スカートをすり抜け稲葉裏返し伝言ゲームのように風ゆく

・手垢のつかない表現で奔放自在に詠む。

錯　覚　　藤　沢　牧　田　明　子

雨風に揉まるる樹々の葉を見れば夕べの美酒は錯覚ならむ

ひさびさの晴れ間まぶしく傘を干す地球(テラ)の一点にわたくしと影

腰折りて赤詰草など摘みつつも寄り道ばかりのわが歩にありぬ

甕に挿すあぢさゐ一本(ひとつ)定まらず今朝の気鬱をさしておきたり

白雲を退(の)けて広がる青空の下ゆく車輪の影のちひさし

・日常の中に詩を発見するセンスが良い。

土曜出勤　　さいたま　松沢　みどり

今週は土曜出勤もうすでに疲れた体で職場へ向かう

寮母の作るカレーの匂いを嗅ぎながら課内、部内と会議は続く

昼過ぎに会議は果てて夫と子の待つ家へ急ぐカレーは食べず

仕事終え自転車を漕ぐ帰り道ここは坂道だったと気づく

・奮闘する作者の姿に思わず声援を送りたくなる一連。

監視カメラ　　横浜　山下　紘正

「予約の方が先になります」と言はれゐて待合室に黙して座る

トランプが疾風のごとく去りし後梅雨の豪雨が鹿児島襲ふ

玄関口の監視カメラに微笑みて今日の生きるを残して終はる

・日常の齟齬を掬う。四首目、シニックの凄みを漂わせる。

〈作品三〉

七夕　　鎌倉　小笹　岐美子

増水に紛れ出たるか鯉一匹浅瀬に太き体くねらす

これも皆プラゴミとなる七夕のテラテラ光る飾りの多く

高齢ゆえ手術はせぬと決めたれば母の食欲旺盛となる

・対象への切り込みが鋭い。二首目の批評精神に注目。

初出荷　　尾道　柏原　貞雄

起きがけに外はパラパラ雨の音のんびり出来るぞ今日一日は

記録では一番遅れた入梅とう六月二十七日さあ降ってくれ

リハビリの指折り運動今日も駄目先生だって間違えている

・いきいきとした口語表現に素朴なユーモアが滲む。

カサブランカ　　大分　中島　紘子

カサブランカわれら姉妹と同じ六つ順よく咲きて散りゆきにけり

酒飲みが飲まぬをサルに似たりとぞ飲まぬが見れば飲むが猿なり

根子岳の頭打ちわり鎮もりて涅槃に入りし阿蘇の山神

・二首目は古典を摂取して巧み。三首目は骨太でダイナミック。

最後の行　　三鷹　能城　春美

ひとつかみほどの粗塩もみ込めば枝豆のあお夏を呼び寄す

一人では出掛けられなくなりました最後の行に小さくありぬ

悲恋とも予感のありてうす黄から青紫へ深まるあじさい

・移ろいゆくものを哀感深く詠む。対象との距離感が程よい。

あをき水　　鎌倉　渡邉　典子

若竹を打つあけがたの粗雨(あらあめ)をながく聞きをり音消ゆるまで

池の上(へ)に風立つあした巨蓮(おほはす)の葉裏をのぼるあをき水みゆ

合歓咲きてなほ暮れがたき夕空を呼吸のやうに時が過ぎゆく

・時間を捉える視点がある。三首目の比喩が斬新。

松花堂弁当

大井田啓子

満開のさくらの下で松花堂弁当ひろぐ母と並びて

「わたしだれ」と鼻先指せば耳とほき母は「鼻」と朗らかに言ふ

知人（しりびと）の話として告げてをり母の血管の細くなりしを

母住めるホームの脇の畑には育ちざかりの秋の大根

道ばたに畑のみどり眺めたるあとに母住むホームへ入りぬ

鳩の声やみたる空のがらんどうに老い母の顔大きく浮かぶ

この夏も暑かったね　裏庭の伸び放題のベゴニアに花

亡き人の影としきりに話しゐし母にこの世はおぼろでありしか

生きる意味わからぬと言ふ母が百三歳まで生きてくれたり

まぼろしの母を伴ひふるさとをひとめぐりせり　母の産土

背高きペンペン草が道沿ひに並びわたしと一緒に歩く

近詠十五首

風のごと子ら帰りたりわたくしも母には風でありしと思ふ

紫式部しだるる角をまがりつつ故郷に母をらぬさびしさ

山間（やまあひ）の池に枯葉を落としつつ楠の青葉が深々とあり

軒近き木に今日も来て啼く蟬を同じ蟬だと思ふ　晩夏

ひと言随想

リンゴの思い出

一回忌が終ると不思議に母との距離が少し遠くなった。法事とは、その人を故人として確認し前向きに生きてゆく為の人間の知恵だったのかと得心する。

それでも青空に浮かんでいる母とふっと対話している自分に気が付いたりもする。私の息子達は私がいなくなった時どんな風に思い出してくれるかな、とちょっと楽しく想像してみたりする。

短歌を始めて二十二年目になる。ほんの腰掛のつもりで始めたのにアッという間だった。この年月の長さは生まれてから母と一緒に過ごした年月に近い。疎開先の母の実家で過ごした数年は特に思い出が多い。隣町の精米所まで母や姉弟と一緒にリヤカーで米俵を運んだことがあったが、その帰り、道端に腰を下して大きなリンゴを一つずつ齧ったことが今も鮮かである。

村野次郎への旅（117）

「ザムボア」と次郎（十）

千々和　久幸

「ザムボア」第四巻第一號（復活號）は、大正7（1918）年1月に発刊された。村野先生の「月蝕の夜」は、前回は掲載するだけに留まったので、改めて読んでおこう。

月蝕の夜　　村野　次郎

1　月蝕の光は暗しさうさうと鳴る笹藪にひと入る見ゆ

月蝕の不気味な雰囲気を笹藪に入る人を配してドラマチックに盛り上げた、という感じの歌である。この主人公は、世上話題になったに違いない月蝕に関心を示さなかった。何の用があったのか解らない。あるいは藪の中の小径を通過しただけかも知れない。

しかし内容はそうそうと笹藪がなるばかりである、と情景を提示するだけに留める。これが当時の先生の抒情である。

2　戸山學校の土手の笹葉に風出でて剱術の聲のをりをり聞ゆ

戸山學校については前回に紹介しておいたので説明を省く。ここではこの固有名詞が醸し出す時代の雰囲気、広がりを提示しておけばすむ。あとは読者の想像力に委ねる。

また二、三句の余裕ある表現が、一首に厚みと親近感を与えている。ただ下句の「をりをり聞ゆ」は今日では類型的な表現になってしまったが、当時もパターンがあったものかどうか、研究課題にしておこう。

3　塵埃坂は夕風さむし路ばたの小石いくつかかげ落しゐつ

初句の「塵埃坂」は調べがつかないが、恐らくそんな揶揄的なネーミングで呼ばれる坂が、先生の生活圏にあったに違いない。にも関わらずこの歌はこの突出した初句にこだわることなく二句以下は、手堅く真っ当に詠まれている。小石に落ちている影など細部にまで目が行き届いている。

当時の先生には初句をダシに、ひと捻りするような悪戯ごころは無かったのだ。

ついでに記しておけば、掲載された結句は「かげ落しゐる」となっているが、後にペン書きで「ゐつ」と直されている。ここではそれを先生の推敲と考えて、後者を採った。

4　日の暮れて牛たどたどと歩み來る足下青き野菜の光

先生に当時デッサンという発想があったのかどうかは解らないが、こうして読んでいくとその詠み口は、対象を如何に正確に再現するかに意を用いられていることが窺える。

後年、わたしは先生にデッサンの重要性を教えられたが、先生の初期作品の多くはそのひたすらな実践であったことが解る。

この一首は、一日の労働に疲れた牛が野菜畑の中を帰ってくる情景と読んだのだが、さにあらず。次の歌と連作で読むと、牛は疲れ切ってまだ仕事をしているのだ。

注目すべきは、この情景から農夫を消した（表現しなかった）ことである。そこに先生の工夫があったとも読める。消されたがゆえに、

かえって牛の向こうに疲れた農夫が見える、という構図になっている。惜しむらくは上、下句の構成には未だ難があり、デッサン途上という気がするのだが、どうだろう。

5　竹藪のかなたに牛を追へる聲今は聞きつつ寒さを覺ゆ

はたせるかな、農夫はこの歌で黒幕として登場する。竹藪と畑はひと続きになっているのだろう。今日一日、目一杯働いたのだが、さすがに日が暮れると牛を追う農夫の声にさえ寒さが増してきた、と読んだ。

だが再読して「今は聞きつつ」は農夫ではなく作者ではないか、という気もしてきた。となればその時間経過をどう埋めるか、いずれにしても曖昧さの残る表現である。

6　海のかぜ深く吹き入る雨の森地に歩むは白鷺ならし

詩句を追っていけば、取り立てて技巧のある歌ではない。つまり個々の情景は、作者が見た時間に従って並べられている。組替えたりアンコが入ったり、まして余計な注釈もない。外連味などは最初から先生の歌とは無縁のものだ。それだけに温和しい、穏和な歌という印象を受ける。

このような歌にスリリングな展開を求めてはならない。再現（描写）された現実をそのまま受容すればいい。

7　力學の書讀み疲れ眠る人を見つつさびしくなりにけり吾は（圖書館にて）

二句まで読み、ああ先生はこんな分野の本まで読まれるのかと早合点してしまった。先の3、4の早トチリといい、また7のこの歌といい、先入主は作者の意図を歪める結果になる。先を急ぐことはないのだ。

さてこの一首の眼目は、四句の主観の表出にある。今回の「月蝕の夜」一連で、明確に主観の打ち出されている歌はこの一首のみである。わたしは本稿の「地上巡禮と次郎」（六）でこう書いたのだった。

「いったいわたしたちより上の世代、粗っぽく言ってしまえば近代短歌は主観語（感情表現）を恐れない、という印象がある。『かなし』『あわれ』『なつかし』『苦し』『うれし』などは、殆ど手放しで使われている」と。

主観語は使い方にもよろうが、直截的で概念的かつ類型的である。これでは作者の個性を覆ってしまうことになりかねない。だからわたしたちは警戒をする。

この歌では「さびしくなりにけり」がそれである。ヒントが示されていないから、いきおい受容が通俗の方へ傾斜する。この歌で言うなら、図書館まできて難しい本を読んでいる割には、居眠りなんぞしてあわれな奴、というレベルで受容されてしまう。

本当は主人公は寸暇を割いて研究論文のため連日図書館に通い、疲労困憊していたのかも知れない。作者はそんな想像をして、主人公に同情を寄せたとも読めよう。

8　足冷えていまだ寝らえず霜の夜にほとほとうすきひげ撫でて居り

先生には珍しく、ちょっと愛嬌のある歌である。今日ほどエア・コンの普及していない時代だから、霜の夜の足の冷えは格別であったろう。先生に寝酒は無縁だし、また羊を数えるような辛気くさいこともしない。

代わりにひげを撫でるなどは、大身の大らかな嗜みというべきか。先生、時に二十四歳。こんなことでも無ければ、「ほとほとうすき」ひげに気づくこともなかったろうに、と余計なことを考えニンマリした。

「足冷えていまだ寝らえず」は、さほど深刻な状態とも思えないのだが、どうだろう。